西中学校だより

令和３年３月１９日
東久留米市立西中学校

令和２年度を終えるに当たり

校 長　　薮 野　勝 久

学校は「良き社会人」を育成すること、それが学校の使命であり、また社会的役割でもあります。その責任を全うするための条件として、個人の資質・能力の向上、特に学力と人間関係力の向上を目指してきました。また、その実現に向けた必須の条件である「正義の通る集団」の育成、つまり良き集団の育成に努め、よき社会人の育成条件を整えてまいりました。

学力の向上では、到達目標の設定が今年度試行から６年目を迎え、学習意欲という点で成果が上がっているものと捉えています。

個々の道徳性の向上に関して言えば、やはりいじめ撲滅などの人間関係力の向上が最も大きな課題と言えます。私たちはこれまで研究で培ってきた他者理解能力（役割取得能力）の向上と、多面的・多角的に物事を見る見方考え方の獲得のための道徳科の授業実践に努めて参りました。多くの生徒がよりよい人間関係の築ける人に少しずつ成長していると捉えています。

学級経営に関しても、これまで培ってきた実践研究の成果をもとに、学級活動における「コミュニケーション力の向上」に力を注ぎ、望ましい人間関係の構築を目指してまいりました。学級での話し合い活動では生徒一人一人が民主的で公平･公正な、正義の通る集団の一員として立派に成長していることが伺え、成果と考えております。

生徒会活動では、生徒自身が「自分たちの学校を自らの手でよい学校にしていく」取組を行ってきました。それぞれの生徒個人には、これらの取組を通して集団に寄与・貢献しようとする態度の育成を目指しました。普段の子供たちの学校生活を評価するならば、学年が上がる毎にどの学年、どの学級、どの生徒もよく成長し、安心して学校生活を送れる学校を創り上げつつあると考えています。

今月１９日（金）には第５２回卒業式を挙行いたしました。昨年同様、コロナウイルス蔓延防止の観点から時間的空間的制約はあったものの、３ 年生１４３名それぞれが、自分の進路を自分で切り拓き、新たな一歩を踏み始めました。式辞では、はなむけの言葉として「対話」について話をし、３年生への最後の言葉といたしました。保護者の皆様にはこの

日を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。

最後になりましたが、保護者の皆様には本校に対する深いご理解とご協力、誠にありがとうございました。生徒の更なる成長と西中学校の益々の発展に向けて今後も教職員一同努力してまいりますので、ご支援宜しくお願い致します。

第五十二回卒業式　式辞より　（抜粋）

はなむけの言葉

・・・省略

そこで、よき社会人としてこれから巣立っていく皆さんへのはなむけの言葉として、コミュニケーションの基本である「対話」について、お話しをしたいと思います。

「なぁんだ、対話か、道徳の時間でよくやっているじゃないですか。」そんな声が聞こえてきそうです。しかし、実は対話はそう簡単にできることではないのです。

一般に対話とは、人と人が相対して話をし、意思や考えを伝え合う、これが対話ですが、これには様々な形態があります。

そこで、頭の中に横に引いた一本の数直線を描いてみてください。この線の一番左側に点を付ってその上に「ディベート」と書いてください。その少し離れた右側に点を付ってそこに「ディスカッション」と書いてください。そして数直線の一番右端に「対話」と書いてください[注1]。

では、この数直線の意味することは何でしょうか。それを考えてみましょう。

一番左にあるディベートは、例えばある事柄について賛成派、反対派に分かれ討論しあいます。これは一般にどちらが正しいのかと言うよりも、むしろ相手を打ち負かすことにその目的があるように思えます。

ディスカッションも同様で、ある人[注2]の言葉を借りれば、誰が強いかを決めることにその目的があり、どちらも勝つか負けるか、それが目的となります。

それに対して一番右の「対話」では勝者も敗者もいません。相手の利益は自分の利益であり、自分の利益も相手の利益、と言うより、何がみんなの利益となるのか、ということを話し合うことがグループ全員の目的となるのです。誰かの間違いを指摘し修正することはグループ全員のためになるのです。こうした対話を理論物理学者で哲学者のデイビット・ボームという人は「ダイアローグ」と呼びました[注3]。

従って、この数直線の意味することは、左から右に移るに従って「対立」が少なくなっている、ということが解ると思うのです。こうした対話＝ダイアローグは古代ギリシャの時代に非常に尊ばれた考え方[注4]でもありますが、現代社会では失われてしまったとも言われています。

では、話し合い活動の中で対立が生まれる構造、ダイアローグにならない理由を考えてみましょう。

先のボームは、何かのことで対話中に意見が対立すると、「人は自分の想定(意見)を正当化せずにいられない場合が多く、感情的に相手を攻撃することでそれを守ろうとする。」そればかりか、相手が単に自分の意見の内容を否定しただけなのに、それを受けた本人は自分自身が否定されたかのように捉えてしまう傾向、つまり「意見と自分とを同一視」してしまう傾向がある。自分の「意見が正しいなら、守ろうとする必要はない。もし、間違った意見なら、そもそも守る必要はあるだろうか？」と言っています。

対話の目的は何か。それは相手を打ち負かすことにあるのではなく、仲良くなる事や、正しい考えは何かを考える事、何か新しい考えを両者で発見する事などの共同作業にあるのです。そうであるならば、例え自分の意見が否定されても、自分が否定されていると考えるのでは無く、堂々と、どうぞ私の意見を正当に審議してください、と言わんばかりに自分の考えを皆の前にぶら下げる覚悟がダイアローグには必要だ、と言うことです。

対立が生まれる構造の二つ目は、誰が悪いかを問うことにあるのだと私は考えます。人間関係のトラブルではこれが原因の大半です。テレビやニュースを見ていても、確かに重要なことではありますが、責任はだれにあるか、といったことに終始してしいるように感じます。「何が正しいだけを考え、誰が正しいかを考えない」といった人[注6]の言葉を借りれば、「誰が悪いのかではなく、何が正しいかを話し合う」、これがダイアローグ構築には必要なのだと思うのです。

対立が生まれる構造の三つ目は、他者と自分は異なるということです。先日雨上がりに校舎の廊下から北方向に大きな虹が見えました。多くの先生たちは虹を指さしながら口々にきれいだと言い合い、皆同じ虹を見ている、そう思っていたのではないでしょうか。しかし科学はそれを否定します。「虹など存在しない。空気中に多く存在している水滴を、太陽を背にして見ると、虹という認識を各自がつくる。それがどれもみなよく似ているため同じ虹を見ていると考えてしまうのだ[注7]」。見ることですら他者と異なるのですから、例えば「思いやり」などといった頭の中の考えは、皆が同じであるはずがありません。そうなると他者の考えを聴いて、そして解るということは容易なことではないということが解ります。

こんな提案をする人がいます。「あなたが・・・友だち、あるいは何人かの友人たちと議論になった時、少しの間、実験のために議論をやめて、次のルールに従ってみてほしい。それは、「あなたは、先に話した人の考えや気持ちを正確にくり返してみて、その人に満足してもらった後でしか話をしてはいけない」というものである。・・・自分のものの見方を提示する前に、話している人の枠組みに真に近づいて、相手の考えや感情をあなたが要約することができるくらいに、よ

く理解することが必要だと言うことである。簡単なことのようにきこえるだろうか？」[注8] 人の話をよく聴くこと、人の考えを理解することがどれ程困難なことかをよく表している提案です。こうしたことを乗り越える先に人と人、国と国の対立のない関係が生まれるのだと思います。

私は、対話＝ダイアローグのできる人を「良き社会人」の必須の条件だと思っています。皆さんが良き社会人となって幸福な人生を歩み、社会を対立のない良き社会に導く人になることを心から願っています。これが卒業する皆さんに最後に送る言葉です。

令和三年　三月十九日

東久留米市立　西中学校　校長　薮野勝久

注１：『フィールドブック 学習する組織「５つの能力」』Ｐ．センゲ他（p.344）

注２：ウイリアム・アイザックス　マサチューセッツ工科大学で MIT 組織学習センターのダイアログ・プロジェクトの責任者を務めた人。

注３：『ダイアローグ』デイビット・ボーム（p.44－）一読を勧めます。
ダイアローグとは始め哲学者マルティン・ブーバーが相手ときちんと向き合い人間として尊重することを言い表すために使った言葉。

注４：プラトンの『パイドロス』に見られるディアレクティケー（p.135）に近い考え方だと思います。約 2500 年読み継がれた本。一読を勧めます。

注５：『学習する組織』Ｐ．センゲ（P.322）　マネジメントの新常識を打ち立てて世界的に読まれた名著。大人になったら読んでみよう。

注６：『マネジメント（エッセンシャル版）』P.F.ドラッカー（p.130）「もしドラ」と言われて話題になった漫画の中で高校生のマネジャーが読んだ本。一読を勧めます。

注７：『ダイアローグ』デイビット・ボーム（p.132）

注８：「自己実現の道(p.296)」または「人間関係論(p.171)」カール・ロジャース　ワシントンの国会図書館が行った「次の世紀に残したい 100 冊の本」に選ばれた名著です。

保護者の皆様、地域の皆様、関係機関の皆様、1年間本校の教育活動へのご理解とご支援を誠にありがとうございました。おかげさまで、生徒たちは大きく成長いたしました。感謝いたします。来年度もどうかよろしくお願いいたします。